

辛抱：つらいことや苦しいことをこらえること。がまん。(大修館・明鏡国語辞典)

快感原則 その2 (辛抱について)

ケーキを食べて「おいしい」という快感を得たい。一方では、体重が減るといふ快感を得たい(体重が増える不快感から逃れたい)。食べよっかなあ。食べないどころかあ。異なる快感原則がぶつかり合うことによって人は悩む。このような対立する快感原則のせめぎ合いをジレンマと呼ぶ。これによってストレス(抑圧)を受けることで、人間の心は成長するのだと心理学者は指摘する。簡単に言えば、悩んで悩んで、迷って迷って、若者は健全な大人へと成長する。悩むことを繰り返し、迷うことを重ねて、人間はより深い快感を得るための正しい選択肢を選ぶ訓練をする・・・ここまでが“おさらい”。

辛抱という言葉があるけれど、その意味について考えてみよう。国語辞典にあるように、辛いことをじっと我慢することがすべて辛抱かと言えば、そうでもない。例えば死の床にある病人が苦痛と闘う心は辛抱ではないし、罪を犯して牢屋に入れられた者が自由を奪われる苦痛を我慢することも辛抱とは言わない。辛いことをじっと我慢するにしても、とりわけ未来に何かしらの“快感”が用意されていて、その快感を手にするため我慢したり、堪え忍んだりするメンタリティを、取り立てて「辛抱」と言うのだ。

甘やかされて育った子供は辛抱ができない。お菓子が食べたいと言えば菓子が与えられ、ゲームがしたくなれば、すぐにゲーム機を買ってもらえる、そんなふうについて目先の快感原則に従ってばかりいた心は、ジレンマによるストレスを経験したことがない。その結果、健全に成長することができなかつたと考えるべきではないだろうか。その上、彼はより深い快感を得るための正しい選択肢を選ぶための訓練がまるっきりできていないのだ。

だとすれば、辛抱とは、繰り返されるジレンマのストレスによって心を健全に成長させた結果、どの快感原則に従って行動すれば最も深い喜びがもたらされるかが正しく判断でき、目先の浅い快楽をもたらす快感原則に惑わされないメンタリティ、ということになる。そして、折しも時は夏。暑いからこそ、辛いからこそ、苦しいからこそ、“辛抱”というメンタリティを鍛えるには絶好の season なのである。

シングルス。お互いに深いボールの長いラリーが続いている。ちょっと無理っぽいけど、打ち込んじゃおうかな？それともチャンスボールが来るまで“辛抱”しようか？(ジレンマ)ここで“辛抱”を知らない心は、本人も気づかないうちに次のように考える。「打ち込んで、それが決まれば、この苦しいラリーから解放される。いや、仮にアウトになっても、この苦しみからは解放されるのだ。だったら、行っちゃえ！」バコ〜〜〜ン！・・・カシャッ！(ネットにかかった音)

ナニ言ってるのかよくわかんないってか？辛抱して、オレの話をちゃんと聞けということだ。きっといいことがあるから。